

特集展示  
山水画の世界



楼閣山水図 曾我蕭白筆 旧和中散本舗大角家蔵

栗東の東海道沿い梅ノ木立場で腹薬「和中散」を売る店として有名だった旧和中散本舗大角家住宅には、江戸時代中期を代表する画家のひとり曾我蕭白(1730～1781)による「楼閣山水図」が残されています。奇矯な画風で知られる蕭白ですが、本作品は落ち着きのある骨太な作品に仕上がっています。

また梅ノ木立場からひとつ草津宿寄りにある目川立場(現 栗東市岡)には、名物目川田楽を売る「元伊勢屋」があり、その主人であった岡笠山は、地元栗東の文人画家として多くの作品を残しました。中には軽妙な筆致で描かれた山水図もみられます。

栗太郡下笠(現 草津市下笠町)に生まれた横井金谷(1761～1832)は、栗太郡ゆかりの文人画家としてよく知られていますが、文化元年(1804)から三宝院門跡高演法親王の大峰入りに付き従って吉野から金峰山、大峰山、熊野をまわったことにより、雄大な山水図を描き残すようになりました。

本展では、こういった人々の作品を中心に、山水をテーマにした絵画を紹介します。山水とは単なる風景画ではなく、大きな自然のめぐりの中に調和しつつ遊ぶ、人間世界を超越した理想郷としての心象風景でもありました。山水というテーマに込められた、画家たちのさまざまなイメージを感じ取っていただければ幸いです。

2007.5.12～6.10

栗東歴史民俗博物館

**曾我蕭白(そが しょうはく) 1730年～1781年**

京の商家に生まれた蕭白は、蒲生郡日野の高田敬輔(1674～1755)に師事しています。蕭白の画業は、近年とみに高まってきていますが、江戸時代には「画体いやし」との非難と、その奇怪さを胆力ありとして評価する見方が相半ばしていました。伊藤若冲ともども、「異端の画家」「奇想の画家」との位置付けから、円山応挙と対比される画家へと再評価されるようになってきました。

東海道六地蔵にある旧和中散本舗大角家書院の襖絵楼閣山水図は、謹厳、緻密に描かれていて、蕭白の強烈な個性はおさえられている。大角家には書院や小座敷の小襖にも蕭白の作品が伝わり、柔らかな筆法によって描かれている。

楼閣山水図 曾我蕭白筆 四面

紙本墨画 各縦 168.5cm 横 92.5cm 江戸時代 旧和中散本舗大角家

款記「曾我蕭白筆(花押)」印章「蛇足軒蕭白」白文方印・「曾我氏」朱文方印

東海道石部宿と草津宿の間、梅木立場には数軒の和中散屋が軒を並べていました。いまは重要文化財旧和中散本舗大角家を残すのみとなっています。小休本陣でもあり、諸大名の休泊する書院の上段の間とお次の間の境に曾我蕭白の襖絵四枚はあります。お次の間側には松竹梅図、上段の間側に楼閣山水図が描かれています。右上から左に下る山容と楼閣、中央から左上に向かう遠景との構成が、この山水図に安定感をもたらしています。

**横井金谷(よこい きんこく) 1761年～1832年**

栗太郡下笠(現 草津市下笠町)に生まれた金谷は、浄土宗の僧となり、天明元年(1781)、京都北野の金谷山極楽寺の住職となったことから、生涯「金谷」の雅号を用いました。与謝蕪村(1716～1783)に私淑し、画業を学んでいったのです。

金谷は、生涯を通じて多くの旅に出ています。そうした中で、金谷の絵に大きな転機が訪れたのは、文化元年(1804)、三宝院門跡高演法親王の大峰入りに従ってからのことでした。吉野から金峰山、大峰山、熊野をめぐる金谷は、一段とスケールの大きな山水画を描くようになり、独自の境地を開いていきました。大峰から帰った後は、比叡山麓に草庵を営み、天保三年(1832)に72歳の生涯を閉じました。

山水図屏風 横井金谷筆 一双

紙本著色 各縦 154.8 cm 横 367.4 cm 江戸時代(文政七年=1824)

右隻款記「自携瓶去沽村酒 / 卻着衫来作主人 / 賜紫法印 / 金谷写」印章「金谷」朱文小判型印

左隻款記「甲申暮冬 / 金谷写於 / 餐霞洞中」印章「金谷」朱文小判型印

文政七年(1824)、諸国を旅していた金谷は近江に戻り、比叡山麓に庵を構えました。餐霞洞も坂本の地に営んだ草庵のひとつであったのだろう。左隻に迫りくる峨峨たる山容を描き、右隻は広々とした空間に連続しています。文政四年(1804)の大峰入りを果たしたあとの金谷は雄大な山水画の世界を描いています。そうした金谷の代表作といえます。

山水図屏風 横井金谷筆 一隻

紙本墨画淡彩 縦 153.0 cm 横 364.6 cm 江戸時代(文政二年=1819)

款記「五湖帰去孤舟月 / 六国平来両鬢霜 / 于時己卯春閏正月 / 法印金谷写併書」

印章「金谷」朱文小判型印

画面右上に見える賛文は、中国唐代の詩集『三体詩』にある李郢の「江上に王將軍に逢う」からとられたものです。王將軍は揚子江に浮かぶ小舟のなかに描かれています。雄大な自然の中に描かれた小さな舟、この対比から生まれた緊張感と静けさが画面を支配しています。かつて六国

を平定してきた武将が隠退し、月明かりの下に孤舟を浮かべて、いまは静かに余生を送っている情景が見事に絵画化されているといえるでしょう。

### 岡 笠山(おか りつざん)

栗太郡岡村(現、栗東市岡)の人。生没年は明らかでないが享和三年(1803)の『東海道人物志』に画家として紹介されている。岡野五左衛門といい、名は惟精、笠山は号である。与謝蕪村に私淑して画業を磨いていった。笠山の作品のなかに、江戸時代後期を代表する歌人、香川景樹(1768～1843)が和歌を賛した図のあること、また壬午の年記をもつ作品は、文政五年(1822)に描かれたものであり、活躍したところが分かる。

笠山は、家号を元伊勢屋という目川田楽茶屋の主人でもあった。元伊勢屋・小島屋・京伊勢屋の三軒が知られる目川田楽茶屋は、豆腐の味噌田楽や菜飯を名物として、多くの名所記や地誌に紹介されている。

夏景山水図 岡 笠山筆 一幅 絹本着色 縦126.0cm 横41.2cm 江戸時代 館蔵  
款記「淡海ノ笠山」 印章「岡惟精印」白文方印

遠景の山並みと、近景から中景に連続する空間を霞みによって隔てています。中景の表現を見ますと、比較的若いころの作品なのではないでしょうか。樹木や山岳など丁寧に描き込まれていて、画面全体から清々しい初夏の季節感があふれています。

溪荘訪友図 岡 笠山筆 一幅 絹本着色 縦104.5cm 横44.2cm 江戸時代 館蔵  
款記「淡海ノ笠山写」 印章「岡印惟精」白文方印 「字沖一」朱文方印

水辺に建てられた亭にはすでに人が集まっています。そこに供を従えた人物が橋上を渡っています。待ちかねたのでしょうか、迎えの人が門前に立っています。近景に配された家屋と人物は、斜めに延びた雄松や樹木によって安定した構図のなかで、ゆったりとした時の経過をかもし出しています。霞のかかった山容のさらに奥に遠山がのぞき、奥行きを深さを与えています。与謝蕪村に私淑した笠山にふさわしい山水図といえるでしょう。

溪亭帰山図 岡 笠山筆 一幅 紙本墨画 縦127.4cm 横34.4cm 江戸時代 館蔵  
款記「笠山写」 印章「岡印惟精」白文方印

腰に瓢箪を下げた人物が静かな足取りで家路に向かっていきます。手に持つのは釣竿でしょうか。山の中腹にある瀑布から、滝の音は聞こえてきそうですが、足下を流れる水音はやさしい。

橋の兩岸に描かれた樹木と家の背後の木立によって囲まれた世界は、静けさに満ちあふれ、あたかも外界の騒音をかき消してくれているかのようではありませんか。

深山行楽図 岡 笠山筆 一幅 紙本墨画 縦131.3cm 横28.5cm 江戸時代 館蔵  
款記「笠山」 印章「岡印惟精」白文方印

画面下に流れ落ちる滝の少し上流に架かった橋を渡る二人の人物がいる。前を歩くのが主人であろうか。そのあとに従者を連れている。行楽におもむく途中なののでしょうか。この山水図には家屋を描いておりませんが、やはり山房に住む友のもとに、尋ねる途中なののでしょうか。二人のもの静かな足取りは、たんなる行楽ではなく、仙境に向かっているのでしょうか。

溪声談話図 岡 笠山筆 一幅 紙本墨画淡彩 縦132.0cm 横29.1cm 江戸時代 館蔵  
款記「笠山」 印章「岡印惟精」白文方印

厳しくそそり立った山を背にして建つ茅屋に、二人の人物が談話に興じている。溪谷を流れ落

ちる滝の音が快い響きとなって聞こえてくるようだ。笠山には珍しく明快な筆致で描かれ、澄み切ったさわやかに満ち溢れています。溪声談話図の世界は、仙境を表わしたものであり、文人たちの理想郷なのです。笠山の描く山水画の世界は、元伊勢屋の主人の余技の世界を遥かに超えているといえるでしょう。

秋景山水図 岡 笠山筆 一幅 紙本墨画淡彩 縦 121.0cm 横 28.3cm 江戸時代 館蔵  
款記「湖東ノ笠山」 印章「岡印惟精」白文方印・「号茅臺」白文方印

蕪村に私淑した笠山にふさわしい山水図です。滝を背景としている茅屋に住む友人を訪ね、一献を傾けようとしているのでしょうか、瓢箪を携えて山道を行く人物を描いています。背後には紅葉した秋の山景を描き、遠山がかすんでいる。細やかに丁寧な筆つかいによって描かれた作品に仕上がっており、山水画における笠山の到達点を示す作品となっています。

#### (特別出品)

前赤壁後赤壁図 岸駒粉本 一鋪

紙本墨画 縦 38.8cm 横 151.1cm 江戸時代 岸大路家伝来資料

中国北宋の詩人蘇軾（蘇東坡）の詠んだ「赤壁の賦」は、「前赤壁の賦」と「後赤壁の賦」からなり、秋七月十六日の夜の舟遊びと三ヶ月後、冬の赤壁に遊んだときに詠じた詩文を画題としたものです。岸駒（1749～1838）による前赤壁後赤壁図の粉本であり、巻頭に「同功館」朱文方印、巻末に「岸駒賁然」白文連印がある。

近江八景図 岸岱下絵 一鋪

紙本淡彩 縦 30.1cm 横 411.9cm 江戸時代 岸大路家伝来資料

本図は「禁裏八景御間 近江八景図御下絵ノ越前守岸岱」の墨書があり、岸駒の長男として京に生まれた岸岱（1785～1865）が、安政度造営の御所襖絵を描いたときの下絵です。近江八景図は常御殿の襖絵として描かれ、北側の東から南側の西にかけて「比良の暮雪」「堅田の落雁」「矢橋の帰帆」「唐崎の夜雨」「三井の晩鐘」「粟津の晴嵐」「勢多の夕照」「石山の秋月」を描いている。

蘭亭曲水図 岸岱下絵 一鋪

紙本淡彩 縦 38.7cm 横 431.2cm 江戸時代（安政二年＝1855） 岸大路家伝来資料

「御学問所蘭亭曲水之図御下絵ノ越前守岸岱」の墨書を持ち、末尾に「安政二年乙卯十月（岸岱印章）白文方印」と記されるところから、近江八景図と同じく、安政度造営の御所襖絵の下絵であって、御学問所中段の間の蘭亭曲水図だと知られます。中国晋代の曲水に盃を流して詩を作ったという故事にもとづく画題です。

栗東歴史民俗博物館  
〒520-3016 栗東市小野 223 - 8  
077 - 554 - 2733  
会期 2007.5.12～6.10  
編集 佐々木 進